View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	広島大学教育学講座のあゆみ４ ： 坂越正樹教授の語りから
Auther(s)	坂越，正樹；三時，眞貴子；丸山，恭司；山田，浩之
Citation	教育科学 , 32 : 65 - 100
Issue Date	2020-03-01
DOI	
Self DOI	10.15027/49151
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049151
Right	(c) 広島大学大学院教育学研究科教育学教室
Relation	

広島大学教育学講座のあゆみ４

― 坂越正樹教授の語りから ―

坂　越　正　樹
（聞き手：三時眞貴子・丸山恭司・山田浩之）

三時眞貴子（以下Ｔ）：今日はありがとうございます。最終講義の際にもお話されていたのですが，広島大学教育学部への進学とか，学部での経験からお話をしていただけないでしょうか。

坂越正樹教授（以下Ｓ）：まずは広島大学教育学部になぜ入学したのかといったところなのですが，私は昭和47年に入学で40年代っていうのは，これは昔話ですが，ベ平連の運動だったり，高校紛争とかの生徒活動なんかでもいろいろ運動があって，それにかぶれていたわけではないのですが，少しずつ教育に関心を持っていて，毎日新聞に「教育の森」というシリーズの掲載があって，ああいうのにすごく触発されて，で教育をやってみたいというのは高校生ぐらいの進学動機になりました。それで出身が兵庫県なので広島っていう西日本トップの教育学部っていう情報も持っていたし，そこに進学しようかっていう……。もちろん，進路指導の先生のアドバイスもあったりして。それで，うちの大学に来ることになりました。

それから，受験することに決めてから私の父親の知り合いというか，姫路師範で杉谷雅文先生，当時の教育哲学教授と同窓だったという人が，当時の兵庫県の教育界でそれなりのポストにいて，広島に行くんだったら紹介してあげるよと言ってくれました。杉谷先生の在職最後の２年あたり，学部生だったから

そんなに直の関係はなかったけど，とりあえず広島に来たから挨拶に行って(笑)。それこそ入学はしたけれども，教育学部教育学科っていうのがよくわかっていない状況でした。言い忘れたけど，基本的には高校の国語の先生になろうと思っていたのですが，先ほど言ったように，教育全体というか学校教育のことに興味関心があったので，当時の高校国語教員養成課程じゃなくして，教育学科のほうに入学して国語の免許を取ろうと，というようなことでしたね。

学部に入って，いわゆる47教教という学年団になるんですけど，まだ，学生紛争の名残が残っていて，広島大学はけっこう学生運動が盛んで，拠点校になっていました。まあだいぶ下火になっていたけど，いわゆるクラス討論を呼びかけられたり，あの時「黒ヘル」さんて言ってましたが，教養部の授業の教室にわーっと入ってきてビラをまいたり，ま，アジったりするようなこともあったりしました。そういうのに入ろうと思っていたわけではないけど，自分たちの47教教っていうクラスもそれなりに，いろいろなことを一緒に考えてみようっていうか，背伸びをしていた部分もあったかもしれないけど。中教審の「期待される人間像」っていうのが出てて，「ああいうのってどうなの？」というような勉強会というか読書会というか半分おしゃべり会も含みながらの，いわゆるクラス内での寄り合いみたいなのも結構ありました。クラスで合宿とか，西条の研修センターにも来たし。それから府中町に青少年活動センターみたいなのがあって，そこに泊まって話し合いのような活動もしました。結構，まとまった動きというか，全員が全員じゃないけれども，みんなで話しあったり考えたりしてみようという空気のある時代だったし，クラスだったですね。

Ｔ：私たちの時も合宿をやって，学科であったと思うんですけど，先生たちの頃の勉強会合宿っていうのは伝統ですか？それとも作ったんですか？

Ｓ：うーん，伝統ということでもなかったと思います。ただ，きっかけはやっぱり，その当時僕らが１年生の時の３年生や４年生が，大学のバリストも経験している人達だったし，そういう人たちが，僕らの新入生のクラスに入ってきて「こういう問題があるんだぞ」とかね（笑）。典型的だったのが，当時ペスタロッチー祭というのがあって，今もペスタロッチー教育賞として続いていますが，当時はある意味形骸化していて，どっかの偉い先生を呼んできて講演会をやるとか，それの仕切りだったり世話役というのに学生が使われる。おかし

いじゃない，みたいな（笑）。今から考えたら大した負担じゃなかったのですが，何のために学生がこうやって動員されるのか，というような声をあげていました。特に僕らの２学年上ですかね，そういう呼びかけもしてくれるし，なかにはセクトに入って活動する人も，結構上の学年にはいたりして。そんな外から風がバーッとくる中，自分たちも少し論理を組もうかという空気があったのかもしれない。

Ｔ：それを嫌がるような人たちはいなかったんですか？

Ｓ：嫌がるというか，積極的に入らない人達はもちろんおられましたよ。クラブを一生懸命やる人もいたし。たしかに，そういう動き，そんなにポリティカルな動きじゃないけど，一緒に勉強会しようやって言ったときやっぱり確かに顔ぶれが固まっては来るよね。

Ｔ：先生たちのクラスは何人ぐらいでしたか？

Ｓ：ええと，記憶が正確ではないんですけど入学したときは28人だったと思います。

Ｔ：いつもそういう会に参加されるのは大体何人くらいでしたか。

Ｓ：そうだな，コアになるメンバーが10人余りくらいはいたかな。

山田浩之（以下Ｙ）：その頃は，デモとかは……

Ｓ：ほとんどなかった。

Ｙ：そういうかたちの活動っていうのは収まってきているころ？それでも自分たちで勉強しようというか。

Ｓ：勉強といってもほんとに大したことなくて。さっき言ったみたいに，「期待される人間像が出たけどこれはどうなのか」とか，堀尾輝久がバイブルみたいな時代だったので（笑）。あんな難しい本，１年生，２年生がよく読んだなと思うけどね，今思えば（笑）。

Ｙ：読書会形式ですか？

Ｓ：ですね。

Ｔ：それは複数学年ではやっていなかったんですか？

Ｓ：なかにはグループによっては１学年上の人が入ってくれたりもしたけど，とくに異学年集団とか，その上の人がリーダーって感じじゃなかったように思いますね。やっぱり学年の，クラスのキャラクターというか構成員によって空

気も変わるじゃないですか。これは名前が挙がっていいけど，今の教職員支援機構の高岡信也理事長とかね。弁も立つし（笑），いろいろ考えるし。
Ｔ：国語の免許を取られているということは国語の授業を受けて，途中から教教の専門に？
Ｓ：基本的に１年生のころから専門の授業もあったし，語学なんかはずっと教教のクラスだった。それから国語の免許を取るっていうのは，そんなに別にクラスから外れるっていう感じじゃなくて。自分で勉強して，とくに東千田町時代なので，教育学部には国語の専門の科目ってないのよね。教国（その当時は高国）の人も教教の人も文学部へ行って，国語学だったり国文学の授業を受けていました。もちろん教教のクラスは結構凝集力があったし，別の学科の国語を勉強している仲間とも友達になるし，凝集する方と拡散していく方とどっちもアリですよね。
Ｔ：私の時代は学部３年生になると免許教科によってまさに分かれていくというか。別の教科の人と会わなくなっていたんですけど。そういうのは？
Ｓ：案外そうでもなかったな。だいたい英語グループ，国語グループ，社会グループ，そんな感じだったと思うけど。でも，よく一緒にはなっていましたよ。
Ｔ：どんな話をしていたんですか？
Ｓ：うーん。何を話していたんだろうな……。まじめなことはさっき言ったような感じ。遊ぶ方はそうだな……，ほんとにとりとめのないことをグダグダと喫茶店に長い時間居座って。広島の喫茶店って，僕も広島来て初めて思ったけど，コーヒーを頼むとあられが出てきて，昆布茶が出てきて（笑）。
Ｔ：え，そうなんですか（笑）。
Ｓ：うん。１時間でも２時間でもそこに座ってごちゃごちゃと。とりとめのない話をしていました（笑）。
Ｔ：授業後とかに？みんなで？
Ｓ：そうですね。
Ｔ：拠点みたいなところってあったんですか？
Ｓ：大学出たすぐ横にあったし。今何になっているのかな，大学の向かいにはアメリカっていう喫茶店があったし，それから少し鷹野橋の方に行くと，そこは高級感があったけど，ブラジルとかあったし。いっぱいそういう喫茶店があ

りました。
Ｔ：喧嘩とか起きないんですか。
Ｓ：もちろん何かやろうとすると，そのあたりはね。トラブルは結構あるし。リーダーが，孤立して（笑）閉じこもりになったりしたこともあったけど。やっぱり一人が走りすぎるとみんながついていけなくなって，リーダーの方はこんなに一生懸命やっているのに君たちは何だ！みたいな話になって。でも，そこはそんなに深刻にはならない。
Ｙ：先生の同級生になるのは，高岡先生と……林先生と加野先生ですか？一緒に，いろいろされたりはしたんですか。
Ｓ：うーん，そんな感じでクラスの勉強会とか。でも学年学年，クラスクラスの空気というか，やっぱり，そこで中心になっている人のキャラクターにもよるのでしょうけど（笑）。下の学年は，ちょっとクールというか，１年だけですが時間的にも社会状況的にもずれがあったと思うし，割とクールな感じがしたよね（笑）。でも，48教教の黒川忠士さんなんかもそうだけど，よく一緒には酒を飲んだり話はしたりはしてましたけど。
Ｙ：今でもとても仲が良い感じに見えるので，そのころから濃密な付き合いがあったのかと思っていました。
Ｓ：確かにね。大学生がよくやるかと思うんだけど誕生日パーティーとか，学生向けの居酒屋もそんなになかったし，それぞれの下宿に集まって鍋をやったりとか。
Ｔ：えと，先生が哲学の研究室に入るのは３年生ですか。
Ｓ：３年生ですね。
Ｔ：これはどうやって決まるんですか。
Ｓ：あの頃はフリーというか，自分が本当に，そこに手を挙げてっていうことで。その時のよその研究室の事情は正確ではないのですが，先生がそんなにうちの研究室はこんなことをやっていますよとか，窓を開いてインフォメーションとか全然なくて。それこそどんな先輩がいるのかな，何しているのかなっていうのを下から見上げながら，ま，あそこ行ってみるかっていう風な感じでしたよね。教育方法学とか，たぶん教育社会学もそうだったと思うんだけど，教育行政学も入れていいかな，あそこは何をするところかは割と見えやすい，僕

らの目からするとね。教育方法学は吉本均先生がいてドイツ語もやらなきゃいけないし，庄原の何とか小学校に行くんだなっていうのが何となく見えていた。哲学とか歴史とか，よくわからないっていうか，何やってんだろうって感じだったけど。後から名前が出てくるかもしれないけど，渡邉満っていう先輩がいて。この人は僕にとっての先達というか，ペスタロッチーの研究者で，２学年上だったけど，僕の学年の中に入ってきて楽しく遊んでくれたりしてました。すごい博識でね，当時から。今も，岡山大学を退職して研究室の本が家に入りきらなくて実家の牛小屋を改造して並べたって話を聞いたんだけど，当時から狭い下宿に本がすごい山積みで，哲学や思想のことをすごくよく知っていました。その人に教えてもらって，研究のことを先に言うと，そこでヘルマン・ノールという人に，文献に出会うのね。そんな形で教育哲学という道筋ができた。

Ｔ：他のお友達というか，……それぞれで決めたんですか？相談したりとか？

Ｓ：そうですね，相談せずにです。吉本先生が好きっていう杉山緑という，もう早めになくなっちゃったけど，それはもう最初から方法に行きたいって言ってたし。それから，瓜生八百実という人は，やはり制度系のことを勉強したいってことで比較の研究室に行って。それから，岡崎公典，今は夙川大の学長かな？彼は教育行政なんかに関心があるって言っていて。よくわからないのは高岡理事長なんだけど，どうしてあの人は西洋教育史に行ったのか（笑）。池端次郎先生，いや横尾壮英先生が好きだったんだろうな。

Ｔ：やはり授業の影響って大きいですか？

Ｓ：さっき名前を挙げた例でいうと，やっぱり自分の関心と授業で提供される中身があっていたからということもあるだろうけど，少なくとも私の場合は，是常正美先生のヘルバルト教育学に（笑）そんなにぴったりと合ったわけではなかった。でも，別にヘルバルトをやらなければならないわけでもなかったし，哲学は自分で選んで自分でやればいいって感じだったので。

Ｔ：事前に訪問とか。

Ｓ：一切なし。学部生の卒論を是常先生に提出したのですが，最後の最後に「君は何を研究したんだったかね？」っていうくらいの（笑）関係ですよね。

Ｔ：研究室に入るというのは，どういうことを意味するんですか。

Ｓ：いわゆる特研だったり，卒論ゼミっていうのは僕の場合はいっさいなかっ

たです。一応教育哲学，その院生が集まる研究室というのがあって，そこにちゃんと助手さんと院生がたまっていたので，そこでちょこちょこと相談をするくらいですね。

Ｔ：では，その哲学の部屋に行くってことが研究室に入る……

Ｓ：そうです。教育学教室の新入生にうちは大学院があって一緒にやるから研究室に行きなさい行きなさいって自分では学部生にメッセージを出すけど，実際のところそうでもなかった（笑）。ただ，ちょっとだけフォローすると，当時の上の人たち，院生の人たちとの接触はいろんな形であったし，教育方法学には福岡教育大の学長をしていた寺尾眞一さんとか，ああいう人たちも僕らと話をしてくれたし。それから，方法には中野和光さんもいたし。交友関係は薄くはなかったです。

Ｔ：では他の研究室のお部屋とかにも行ったりもされていたんですか。

Ｓ：そんなにしょっちゅうじゃないけど。

Ｔ：それは可能だったってことですね。

Ｓ：はい。

Ｔ：ますます研究室選択というのが，よくわからないのですが（笑）一応システム的に決まってはいたんですか？

Ｓ：どうだったかな。研究室選択。あの時のカリキュラムどうなってたかな。卒論ゼミ，卒業研究みたいなのがあったかなぁ。どうだったかな。うーん。少なくとも３年生の時にはあまり自覚がなかったし，今みたいに２年生の終わりだったり３年生前期で確定という感じではなかったように記憶しています。４年生の秋には卒論届けをしなきゃいけないから，そこではちゃんとオフィシャルに研究室が決まるんだけど。

Ｙ：３年生になってから，実際に研究室を考える感じでしたかね？

Ｓ：どうだった？卒業研究とか今の課題研究みたいのってあった？

丸山恭司（以下Ｍ）：３年生の前期から単位を取る形になったのは本当に最近で。正式には３年生の後期から履修する単位で。先生によっては前期から指導する先生もいれば，後期からじゃないと相手にしないみたいなのはしばらくありましたから。そんなに，カリキュラム上しっかり指導するというのは，

Ｙ：正式な単位が。４年の前期後期であって，３年生の時にはなかったんじゃ

ないかな。
Ｔ：そういう時に，３年生の間に（研究関心が）揺れて，他のところに代わろうっていうのはあり得たんでしょうか。
Ｓ：うーん。あんまりそんな人はいなかったと思うね。日常的に院生と話をするっていうのはあったけど，先生はあんまり頼りにしていなかった（笑）。そんなに指導してくれないと思ってたから。というか，先生が学部生の卒論の指導，あれやこれやと言わないのが普通だと思ってました。それはおかしいと思わなかった。
Ｔ：じゃあその当時の坂越先生にとって，先生というか，大学の教員ってどんな存在だったんですか。
Ｓ：うーん。難しい質問だなぁ。僕の場合の個別でいうと，是常先生っていう卒論の指導教官は，自分が４年生，大学院に入るときには定年退職でやめるのははっきりしていて。当時の９月の大学院入試，そこではっきりと教育哲学で大学院をやっていくっていうのが決まるわけです。それからだよね，哲学という感じでしっかり自分なりに意識したのは。かといってそれでもって，是常先生のもとに日参していったわけでもないし，当時の助手で茨城大学に行った田代尚弘先生にお世話になったって感じかな。だから是常先生が自分にとってどんな先生だったかというと，ヘルバルトの研究者としてはすごいし，それからなんていうのかな，ある種，その，古典的大学人，研究者。授業でも学生に何かをこう，メッセージを伝えるというのではなくて，それよりも自分が一生懸命，ヘルバルトの研究をしてきた大学ノートをもってきて，座って教卓の上にノートを開いて淡々と読んでいくという（笑）授業だった。だから，大学の先生ってああいうのだよなっていう，古典的なイメージを植え付けられたっていうのはあるけど。その先生の所へ自分からアクセスをして何か得ようという存在ではなかったかな。
Ｔ：そういう授業って，今，授業で学生たちをインスパイアするって言いますけど，そういうものとは違ったんですか。
Ｓ：そうですね。
Ｔ：どういう風に位置付けられるんですか？
Ｓ：それはいろんな解釈があると思うけど，教員は教員として，自分が今一番

取り組んでいて，自分が一番面白いと思っていて，来月出版しようかと思っている材料を持ってきて学生に提供すると。学生の方は，まだあんまりよくわからないけど，先生がやっているものを受け止めて，面白いと思うか，面白いとは思わないか。でも学生の方はあんまりよくわからないけど，先生の一生懸命やっていることには敬意を表して授業の邪魔はしない（笑）。ただそれをどう解釈するかというか，そう受け止めてどうするかというのはもう学生任せじゃないかな。

Ｔ：聞いていいのかわからないんですけど。そういう授業と，今の授業と，どっちが，大学生にとっていいと思われているのでしょうか。

Ｓ：えっとね，そういう授業が僕らにとって，本当に良かったのか悪かったのかっていうのは，これだけ年数がたってみると，正直，私にとってはそれで良かったというように思います。ただ，自分も教育担当副学長というような仕事をするようになって，これはもう何回もいろんなところで言っているように，そういうやり方が今の大学，学部生に通じるとはとても思わない。むしろ，それを通じる通じると今思っている大学人というのは，それでもって自分が楽をしようとしているとしか（笑）思えない。つまり，「わからないのはお前たちのせいなんだ」と。「つまらないのはお前たちがわかろうとしないからだ」だという，そのエクスキューズでもって，自分の世界の中でしか話をしていない。もちろん，そういう先生が好きだったり，そういう先生にこそ，ひとつの自分のモデルを見出すというのもあってもいいと思うんだけど，今40人のクラスを担当したとすれば，ほとんど２人いるか３人いるかってとこじゃないかな。というか，大学というところが，これもすごい大掴みな話だけど，フンボルト型の研究と教育を一緒にやって先生の背中を見ながら学生が育っていくっていう，あれも一つのユートピアで，決してそういうわけではなかったって説が今は大きいけど，そういう世界をちょっとでも真似しようと思っていたのが昭和47年代ぐらいにはあったんじゃないかな。たぶんそれはもう通用しないと思うし，そういうことができる大学とできない大学に分かれる。ひょっとしたらできる大学っていうのは，もう，日本の中でも，あまりないのかもしれない。

Ｔ：それは大学の，役割が変わったと認識されているということですか。

Ｓ：うーん。それは大学史をされている専門家の先生の判断も聞いてみたいと

ころだけど。これは社会学の専門家に聞いたら出てくることかもしれないけど，これだけマスとかユニバーサルになってくると，大学の機能自体が変化するのはやむをえないと思いますよね。

Ｔ：私の指導教官も先生とそんなに……（笑）。同じ空気を共有されたと思うんですけど。そういうときの回想を，すごく懐かしそうに嬉しそうに話をされるんですが。そういった先生方が，今は無き古き時代の空気感とか状況っていうのは語り継ぐべきものだと思われていますか。

Ｓ：そういう世界があったということは語り継いでいいと思いますけどね。僕も若干あるけど，たぶんそういう世界が自分にとってとても居心地がよかったし，そういう中でアカデミカルな仕事ができたという，そういうのも語り継いでいっていいと思うよ。だけど，今，そういう同じものを再現できるかという話とは別だと思います。

Ｔ：語り継ぐことの，何か特別な意味を持たれているんですか。

Ｓ：うーん。なかなかいまその意味を，パッと的確に言い切れないけれども，これもちょっとさっきの話と矛盾してくるかもしれませんが，40人一つのクラス，学生がいて，そういう思い出話をして，そういう思い出話に一つの憧れをもつ様な学生が一人いても二人いても，それはそれでいいと思う。そういう思い出話の中で育つ学生もいる，そういう中で自分の研究もやっていけるって思えば，それはそれであると思うね。一方で，ちょっと話が微妙だけど，研究室がいっぱいあって先生がいっぱいいて，それで９研究室18人いる先生の中で一人，ちょっとこういう先生もいるよねっていう……のはいいんだけど，だんだんともう先生の数も減ってきて学生をきちっと，というか一定レベルまでもっていかなきゃいけないっていう，そういう仕事をしている中で，なかなかそういう研究室，特徴的な研究室が維持できるかどうかっていうのは難しいかもしれない。あってもいいとは思うよ。

Ｔ：話がずれてしまうかもしれないんですけどいいですか。今の話の流れで，坂越先生がそう言う風に，大学の教育に関心を抱くというか，そういうのを自分の仕事にしていこうと思われたのはどういう経緯なんですか。

Ｓ：成り行きっていうのが一番大きいと思います。自分で自分のことを分析するのは妙ですが，講師，助教授で入ってきたころから，結構こまごまと（笑）

教務のことだったりなんだったりっていうのが降りかかってくるような，そんな位置にいました。まぁ当然そうなると，カリキュラムのことだったり，学生指導のことだったりっていうのも，見えるというか考えなきゃいけなくなる。それだけだったら教育学科講座主任をしてそれでご苦労さんで終わる話しになるのですが，そこから後，学部長とか研究科長とかのポジション，これはもうなんでやる気になったのかと言われたら困るのですが。やっぱりそういう立場で仕事をするようになったからですよね，そういう立場から構成員にメッセージを発するとか，研究はどうするのとか，教育学部の教育はどうなのとか，メッセージを発しなきゃいけないじゃない？それが受け入れられるか反発されるかは別として。とにかく，こうじゃないの？と言わないといけない，そんな中で，ちょっとずつ考えてってことですよね。

Ｔ：そういう風なことを，引き受ける前はあまり考えてなかったんですか？大学の行政のこと。

Ｓ：うん。まあせいぜい実務レベルですよね。

Ｙ：学部時代のことをもうちょっと聞きたいんですけど。教員とのつながり，是常先生とはほとんどなかったとのことだったんですけど，他の先生とのつながりはどうだったんですか？

Ｓ：クラスの中ではほんとに（笑）高岡とか遠慮がないから，いろんな先生のところに出入りして話もしていたんだけど。僕はどちらかというと，あんまり他の先生のところを行き来するっていうのが，苦手というか自分でポチポチとやりましょうって感じだったので，そうでもなかったです。でも，比較的，声をかけてくれる先生も何人かいたし。教育社会学だったら新堀通也先生が僕たちの学年チューターだったので，新入生の時から４年生の時まで，年に一回くらいは集まって話はしましたし。それから吉本先生は，ドイツやるんだったらってことでかわいがってもくれたし。やっぱり先生との関係，学部時代の先生との関係は，僕の場合はそんなに強くなくて。せいぜい助手，院生。むしろ大学院になってからのほうが急に是常先生も含めて，退職された是常先生とも密な関係ができたのは大学院になってからからですかね。

Ｙ：先生の家に遊びに行ったりとか，あるいは，先生方との飲み会があったりとかがあったと聞いているんですけど，そういうのはどのくらい……

Ｓ：えっとですね，クラスでまとまって先生の家に行ったというのは，僕らの学年ではなかったです。荘司雅子先生が招いていてくださるというのはたぶん，２年上くらいの学年までだったと思います。ただ先生の家に行くっていうのは，僕は杉谷さんの家，休み明けには訪ねて，それこそ雑談程度の話はするっていうか。是常先生のところも，さっきから関係薄いって言ってるんだけど，でも，自宅には行ってましたよね。院生時代にはドイツ文献購読会や先生の原稿清書に。そうだな，新堀先生なんかは，学年の宴会をするときには必ず来てもらって。今でもよく覚えてますけど，当時の学生って，吉島の集会所とかを使ってクラスで集まって，本当に二十歳前の学生があんな一升瓶で酒飲んでいいのかってくらい，やかんで沸かして酒飲んでたもんね。なんか変な乾きものとか持ち寄って。そんなところに新堀先生を呼ぶのかって思ってたけど（笑）。でもまじめに先生も来てくれて，しゃべってましたよ。そんなくらいです。「君たち３年生になったんだから私のところで食事を」というのはなかったな。

Ｙ：国語の教員から，大学院へと進路を変えられたのは何か？

Ｓ：えっと，それもまだね，とくにマスターの２年間は，まだ高校教員という方が主だったんです。まだマスターに入っても研究者になろうっていう風には，なれるっていう風にはあまり思っていなくて。４年で出てすぐ高校教員になるっていう道もあったんだけど。せっかく教育を勉強しているんだし，なんか教育哲学っていう，よくわからないのだけれど，そういうことも始めたこともあって，２年間ちょっと勉強してみようというのが正直なところでした。

Ｔ：鳥光先生が昔，研究室で大学院に行くのは一人しか行けないって……

Ｓ：ドクターはね。

Ｔ：あ，ドクターの話でしたか。マスターは別に。

Ｓ：マスターは問題なくて，僕らは３人。鳥光美緒子，上畑良信，坂越の３人の同級生でした。

Ｔ：他の研究室もそれくらい多かったんですか。

Ｓ：当時15人くらいが定員だったかなぁ。もちろん多いところ少ないところもあったと思うけど。うん，この前の最終講義で，当時の修論審査会の表紙を見せたけど（笑），大体あんな感じかね。

Ｍ：あの，先生が影響を受けた先生方っていうのは，教教の中の話だったんで

すけど，たとえば文学部の先生とか，教養の先生とかで影響を受けたっていう方向もあれば，進学にあたって相談に行ったりっていうような，そんな他学部の先生っていうのは。

Ｓ：正直，あんまりなかったな。教養部のチューターが門秀一という哲学の先生で。で，新堀先生と一緒に，その，学年の飲み会とかに来てもらったりしてた。授業も受けたし，１年２年の間は教養の建物をうろうろして出会ったら，その先生と話をしたりもしてましたが，とくに進学とか進路について相談をするというような関係はなかったね。その辺はあんまり（笑），特に学部生の時代って，こそこそとやってたくらいかもしれない。文学部も行ったけど。確かに影響を受けたというか，この先生すごいなと思う先生は何人かいました。やっぱり，国語の先生になるのだったらこういう先生についてよく勉強しなきゃ，という先生はいたけど，やっぱり教教，教育学科なので，そこでどうしようという感じはなかった。当時文学部でいうと，すぐ名前が出て来ない。あの，国語学の小林芳規先生とか，学士院賞だっけ，角筆研究でもらった先生だったり。それから中世文学の稲賀敬二先生だったり。なんというのかな，文学部の３年生４年生と一緒に，その授業に放り込まれるよね，みんなもそうだったよね。だから，古文書をコピーで渡されて，これについて発表しろみたいな（笑）。えーって思ったけど。文学部の誰かに助けてもらったりしながら。ただ，研究の世界っていうのは，ああ，そうなんだっていうことは感じたけど。やっぱりあまり，研究室には近づかなかった。それこそレポートを出しに行った記憶しかないな。

Ｙ：とくに印象に残った授業というのはありますか。

Ｓ：うーん，そうなんだよなー。偉い先生の名前はいっぱい出てくるけど，この先生のこの授業って基本的にあまり出てこないんだよね（一同笑）。いい悪いは別にして，覚えている授業ってことで言うと，１年生で吉本均先生が入門授業，教育学入門みたいなのをやってくれて，当時から，ドイツ語の辞書をひけ，そのあと英語の辞書見て，みたいな話をしてくれたこととか。それから，そうだな井上久雄先生も，吉本先生とペアで教育学概論の授業をやってもらって。井上先生，横尾先生も，結構楽する授業をやっていました。みんなに題目ふってキーワードをふって，「さぁ調べてこい」とかって授業ね。１年生に対

して（笑）。井上久雄先生の授業は，僕が当たったのは教育勅語で，一生懸命調べて報告したりとか。当時からアクティブラーニングをやってましたね。横尾先生は「さぁこの授業で，教育史の事典を作ります」とか言って。キーワードをバーッと書いて。「はい，これを今から図書館に行って調べてきなさい」っていう（笑），そんな授業だった。是常先生はさっき言ったみたいな授業。

M：先生が学部生として授業を受けるその窓から見たときに，高等師範とか文理科大のなにか伝統がまだ残っているとその当時は思っていたのか。それとも，あるいは今思い返したらこれだったのかっていうのはありますか。

S：当時は正直いって，文理科も高師も知ってはいたけど，あんまり意識はしていなくて。やっぱり広大教育，47教教っていう現在性のほうが強かったよね。今から振り返ってみればってことでいうと，本当に典型的な是常先生の授業であったり，それと対照的なものでいうと杉谷雅文先生の，あの先生からは教職の授業をうけました。東千田の大講義室で，もうひたすら語りまくるというか，自分の主義主張というか，自分の説を一生懸命，学生に伝えようとするのが，しゃべってくれるというか語り掛ける授業というそんな感じのはよく覚えています。だからそれが高師か文理かというと，うーん，文理科大学の時代の授業というのはどんなのかよくわからない部分はあるのですが，アカデミックというか，そういう研究中心にした授業は是常先生の授業で感じたし。そんな感じかな。

T：成績ってどうだったんですか。

S：成績……成績は普通にやってたら落とさないよね（笑）。あと，落とす者は，欠席か試験まともに受けないかどっちかですよね。あの時代はね。

T：気にしてましたか。成績とか。

S：成績自体は気にしてない。とれるかどうかだけ気にしてたのじゃないかな。

T：では，ノール研究について少し教えていただけますか。

S：学部生３年生の時かな。さっきから名前が出ている渡邉満さんが，ドイツ語の勉強，当時，大学院（入試）のドイツ語が語学（の試験）でかかっていたので。ドイツ語の勉強もかねて，こんなコピーがあるから読んでみようかという形で勉強会，読書会をやってくれました。そこで使ったのが，ノールの，そのものじゃないのですが，ノール教育学はこんなもんですよっていう薄っぺら

い入門書。それを読んでいて，そっかこれ卒論でこのまま使えるなって（笑）思って。というか，研究室どうしようかっていう最初の話で，さっきから言っているように是常先生に指導してもらおうっていうのじゃなくして，あんな先輩がいてこんな先輩がいてっていう世界の中で決めました。それだったら今一緒に読んでもらっているこの文献を全部しっかり読んでと。当時の卒業論文なので，新しいことだとか何とかっていうよりもまず文献読んでまとめてというような感じだったので。それだったらこれを手本にしようということでドイツ語読んでまとめたのが卒業論文のヘルマン・ノール研究です。

Ｔ：その読書会は２人でされていたんですか。

Ｓ：最初もう１人２人いたかな。でも結局，２人になっちゃって。よく付き合ってくれたと思うんですけどね，先輩がね。ちょっと話が違うけれど，とくに大学院を意識しだすとドイツ語読もうかって声をかけてくれる院生が他にもいました。教育方法学で生活指導の折出健二先生なんかも。何を読んだかっていうとね，これが『共産党宣言』。これも最終講義でしゃべったことですが，そうやって是常先生にノール教育学の研究で卒論を提出して大学院に来ました。大学院の一年間は松田義哲先生というペスタロッチー研究者が，ある意味ピンチヒッター的な形で１年間だけ来てくれました。その間，一応そうなると特別研究というか特研ゼミが始まるので，何回かに一回は発表をしたりしていました。まあね，だって同学年に僕のほかにペスタロッチー研究者が２人もいて，とくに頭の切れる鳥光美緒子さんというのもいたから。先生の目線もそっちの方をちゃんと指導してあげようという感じで。そんな形でいたところへ小笠原道雄先生が非常勤集中講義で教育哲学の特別講義を持ってくれました。先生は当時若かったし，ドイツ語で，とにかくマスター１年の授業でドイツ語文献をバーッと配って「さあこれ読んで来い」みたいな（笑）。ここで頑張らにゃあいかんなと思ったわけですよ。とにかくついていかないといけないって感じで（笑）必死に読めないドイツ語を辞書引いて読んでいきました。そうすると，やっぱり，授業してくれる小笠原先生としても「そうか読んできたのか。読んでくるとは思わなかったけど」みたいな（笑）。そういう感じで関係ができて。当時，先生の人事なんかはそんなのは僕らは全然わかりませんでしたが，でも「あ，来年からこの先生来てくれるのか」って。だったらまだ続けられそうかな，とい

うんでマスター２年。で，さっきの話，マスター２年の時にも，兵庫県，郷里に帰って教員をしないかっていう話がきました。おやじではなくして，おやじの知り合いの教育関係者から「お前の息子，受けさせんのか」という話があって，おやじが「お前どうすんだ」って。その時にはね，郷里で高校教員，国語教師になるか，やっぱり頑張って研究者になれるかどうからないけどこっちのドクター進学の道かという，やっぱり修論を書いているあたりが一つの分かれ目でしたね。

Ｔ：あの，答えにくかったらいいんですけど，先生のご家族とか親族とかって教育関係者が多かったんですか？

Ｓ：そんなに多くはなかったですが，おじさんは中学校の校長をしてました。おやじは市役所の行政マンでしたから。

Ｔ：それでも先生が，広大で大学院に行っているのはなんか知っている。お父さんのつてで，教育界に知り合いがいて。

Ｓ：うんうん。さっきも学部入るときも杉谷先生を紹介してくれた，当時の教育長という人がいたし。別にその人がいるから教員採用試験に有利とか，そんなことはないとしても（笑）。「受けるのかな，どうなのかな。あんたの息子もそろそろ進路が決まらないといけないんじゃないの？」くらいのことだったと思うのですけど。そんなことで，おやじからどっちにするんだという話はありました。

Ｔ：そういう時お父様から，こっちがいいとかいう話は。

Ｓ：ああ，言わない言わない。

Ｔ：任せるという感じだったんですか。どれくらい悩まれたんですか。

Ｓ：自分の性格からしてそんなに真剣に思い詰める方ではなかったし。とにかく悩んでいる時期が修士論文を仕上げなきゃいけないっていう。修士論文の12月とかの時期って一番集中するし，エネルギーをつぎ込む時期じゃなかった？そっちのほうがメインだったので，悩むといってもどうかなという感じだったけど。それに「行く」といっても別に親父は，いやダメとは言わないだろうなあ，という読みもあったし。さっきも言ったけど，研究者になれるかわからないけれども，ドクターへ行ってみようという気になったわけ。やっぱりこれも小笠原先生がおられるということ，小笠原先生の精神科学的教育学，フリット

ナー研究っていうのが僕にとってはやっぱり大きかったよね。あの先生の世界で，似たようなというか，あの先生が開いてる研究のやり方っていうのは，自分にとっても，なんか，あといけるかもしれないなって。
Ｔ：修論を書きながら，冬頃に，大学院にそのまま行こうと思われて。その時にはノールをずっと続けようと思われたんですか？
Ｓ：ずっと続けるかどうかはわからないのだけど，進学してやるのはたぶんこれと同じだろうと。ノールで行くのか，もう少し幅を広げて関連するようなドイツの教育学者研究になっていくのか，そこまではまだ決めてなかったけどね。
Ｔ：大学院に合格されるかどうかっているのは。結局，３人受けられたんですか。一人が枠だったということで。未知だったってことですよね。どういう風に受け止められたんですか？
Ｓ：うーん，難しいよね。同じ研究室で一緒に研究やってきた関係だしね。うーんそうだな，僕はうまくいった方なので，これくらいの気持ちで済んでいるのだけども。同じように修論書いて，あなたは待ちなさいって言われた方は，それはやっぱり何故と思うよね。僕の受け止め方と彼ら彼女の受け止め方はやっぱり全然違うと思うしね。でも，確かにふたを開けるまではどうなるかはわからないっていうのはあった。
Ｔ：先生が大学院に進学された時って院生ってどのくらいですか？
Ｓ：研究室の院生は，マスターが４人いてドクターがやっぱり各学年１，１，１だったね。あと研究生で３人くらいいたのかな？話が戻るけど正確に言わなきゃいけない。えっと，進学か就職で悩んだのは，12月って言ったのですが，本当は５月６月です。マスター２年の。つまり教採を受けるかどうかって時です。その時に教採を受けるか受けないのか，進学か就職かって。そうだそうだ。その時に，まだやりたいっていう話をして。結局，教採を受けずに修論のほうに入って行ったのです。12月に悩んだと言ったのは，修論が書けるかどうかということ，進学できるかどうかということ。進学できなかったら研究生になって，おそらく研究生になれば，ドクター進学のことを考えずに教採のほうに行くのだろうなって。そんなくらいの感じ。
Ｔ：なるほど。じゃ，もしかして合格せずに研究生をしていたら国語の先生になっていたかもしれない？

Ｓ：可能性が大きいですね。
Ｔ：そうなんですか。大学院でノールの研究をずっと続けられてということなんですが，修論を書いた後と，違うもの？
Ｓ：これも一般化できるかどうかは別にして，私たちの時代って，３年間で課程博論文を書けという空気でもなかったし。おそらく今みたいに３年間でなんとか成果を出せって話になったら，もうノールで論文を書いてやるんだとは思ったでしょうが。あんまり，僕らの時代はそういう雰囲気はなかったんですよ。それこそドクター１年入ったら何をやるか，ドイツ語をもう一回やりなおすか，という意識ですよね。ドイツ語リンガフォンを買ってきてもう一度全部やるかっていうそんなくらいのゆっくりした意識。３年間で学位論文なんて考えは全然なかったですね。ただ，それでも少しずつ時代は成果を求める時代になっていたので，教育哲学会に院生の時代に書ければいいねっていうのはあったので，書いて出したけど，ダメで返ってきました。再チャレンジはしないままで（笑）。あの頃は本当に教育哲学会で口頭発表はしたけど，論文には結局ならずじまい。あとは偉い先生の論文集あたりにちょこっと載っけてもらうって話でしたかね。だからノール，ノールってことじゃなくして，ノールがやっていたような科学論，教育科学論を少し見てみましょうとか。それからノールがやってた教育的関係っていうテーマだったら，当時，すこしずつ子ども論とか，そういうのが出てきていたので，ちょっと自分で調べてみようとか。そんな横道もやりつつです。
Ｔ：文学部の授業とかゼミ出られたりはなかったんですか。
Ｓ：それはしなかったな。
Ｔ：文学部に行かれたのは学部時代まで。
Ｓ：うん。学部時代まで。
Ｙ：他の研究会とか，研究室以外の人とのつながりみたいなものはいかがでしたか。
Ｓ：面白いのはね，あの当時の横尾先生，小笠原先生，……井上先生，三好先生も入れていいのかな。なんか馬が合ったのか研究室の合同で研究会しましょうとかね。それこそ，広島女学院でお世話になった松浦正博先生とかと一緒に，西条の研修センターに行って，横尾先生が例のステテコ姿で（笑）ゼミをやっ

たりしましたよ。
Ｔ：寝っ転がったり，いろんな格好でやってたって聞いたことあるんですけど，それですか。
Ｓ：そうそうそう。西洋は西洋で横尾先生のキャラクターで，先輩たちも似たような雰囲気がありました。そういうところで合同でやろうっていうのは，誰が口火を切ったのかわからないけど，哲学も呼ばれて入って。それ以外の，研究室関係じゃないところでというのは，どうだったかな。もう大学院に入ると，それぞれの研究何やってんのというくらいの話はするけども，もう自分の世界でやるので。交流はせいぜい中間発表とか，発表会の時くらいだよね。
Ｙ：学会発表ってどんな感じでしたか。やらなきゃいけないみたいな。
Ｓ：やらなきゃいけないというか，するものだって感じ。暗黙のルールがあって。マスターに入って１年目はまだ早いだろう。２年目に中四国学会で発表しなさい。修論を書いてドクターになったら教育哲学会で発表しなさいって感じだったな。
Ｙ：発表は緊張されたりとかは。
Ｓ：緊張というか，もちろんマスターの時代から教育哲学会に出ていて，空気とかもそれなりに見ていたけれども。宇佐美寛先生という千葉大学の人が（笑）「あんたの研究はなんのためにあるのか」とかって。僕は言われなかったけども。「あんたに言われんでも，ノールの本を読んだらすぐわかるだろうが」というタイプの質問を必ずする人がいて（笑）。僕もそれに近い質問をされたことがあって「勉強します」というような世界でした（笑）。
Ｔ：そこで他大学の先生との関係が生まれるっていうのはあったんですか。
Ｓ：そうだね。僕はそんなに積極的にあれやこれや声をかけてなくて，今の大学院生だったらすぐ仲良くなるし，レジュメを交換して，ということもあるけど。内弁慶で自分の研究室の中ではいろいろやるけど，外ではなかなかでした。ただ，救いだったのは，小笠原先生の人徳というか，いろんなところでいろんなネットワークをお持ちで，やっぱりすごく教育哲学会で注目されてましたしね。フンボルト奨学生として留学してきて，向こうで当時の批判理論とかメタ理論とか，ブレツィンカとか，教育学の最新の学問理論とかをやってきた先生なので，いろんなところに呼ばれて話もしていたし。だからその先生の後ろに

くっついて，同じようなことをやってますっていうので（笑）当時，大阪にいたボルノウの研究の森田孝先生とか，九州にいて亡くなったけど教育人間学の小林博英先生とか，そのあたりの先生が僕らが教育哲学会に行ったときに，あの先生が何をしゃべるかというので気にしていた先生ではありますよね。

Ｙ：最初のマスターのころと，小笠原先生が来られてからだいぶ変わったと思うんですけど。

Ｓ：最初のころの教育哲学の特研っていうのは，噂話というか，伝説としては杉谷先生が火のでるような厳しい特研をされたというのは聞いていた話だけど。でも，僕が経験したのはわりに静かな，ある意味クールというか。あんまり突っ込まないのね。発表しても，その発表についての基本的な枠組みだったり，あるいは学会なんかで何をどういう風にやるつもりなのか，だったり，たとえばこの概念はどうなんですかという質問が多くてあまり踏み込まない。ここに出ているレジュメの中身を理解するための質問が多くて。とくに１年目，僕なんかは結構研究室をうろうろしてましたけど，ゼミ，特研の時にわっと集まって，終わったらみんなさっと引き上げる。哲学の研究室には助手さんとあと一人二人しかいないみたいな，そんなのが結構ありましたね。小笠原先生が来られて，それでもそんなに，それぞれの発表に対して突っ込むというのはなかった，とくに前半のころはね。ただ，共同研究をやり始めたので，一冊のドイツ語の本を読んで発表しあう。ベースがあるから論議ができるようになった。基本的に理解するための質疑ではあるのだけども，でも，その読みでいいのかとか，いや，これはここで扱っている文献のここにあって，ここではこういう言い方をしているのでって。共通の話題ができて，そこでちょっとずつ意見交換をするということができるようになりましたね。でも，正直いって，そうだな，丸山先生と二人でゼミ指導をやるようになってからの方が「その研究，君がやろうとしていることはどんな意味があるのか」みたいな，そういう質問の仕方をするようになりました。比較的，私世代以降かもしれない。

Ｔ：それはなぜですか。

Ｓ：やっぱり，学会とか研究の世界がそういう風な意識を求めるようになったからだね。

Ｙ：先ほどの学部の授業の変化ともリンクするかもしれませんね。

Ｓ：とくに広島大学の教育哲学って，本当にがちがちに読み込んでいく。それこそイタコのように憑依する研究の話じゃないけど（笑）。自分が読んでここで発表している分については絶対の自信があるいうような研究がある意味一つのスタイルとされていたので。

Ｔ：イタコ研究は，一つの伝統として今でも続いているんですか？

Ｓ：今はだいぶ違うと思う。もちろんイタコまでいかなくても，しっかり文献を押さえているのは同じ。ただ面白いところだけつまみ食いしているんじゃないだろうな，っていう。でも，イタコ研究なんて言い出したのは丸山先生世代で，野平慎二君とか藤川信夫君とかいた時代に。彼らはもうこんなイタコ研究やりたくないって言ってた（笑）。

Ｔ：批判的な言葉で使っていたんですか。

Ｓ：そうそうそう。それでも僕らが育ってきた時代は，それが一つのスタイルだったし。今ならそれが教育学研究なり教育哲学研究としての，その意味が問われる。これを研究して，なおかつそれを論文で発表するって，それってなんのため？自分の趣味じゃないでしょ，みたいなね。かといって，明日役に立つ研究ってわけでもないし。そのあたりの折り合い。何をしているのか，どのあたりで自分の存在意義を見つけるのか，そんなことを意識してもらうってことですよね。最近の傾向は。

Ｔ：先生がそういうことを意識し始めたのはいつ頃ですか。

Ｓ：うーん。うちは伝統的に，教授と准教授が一緒になってゼミをやるというのがずっと続いていました。ずっとといっても是常先生はしばらく一人だったし，松田先生も一人だった。小笠原先生もずっと一人の時代が長かったのね。で，小笠原先生のところに今井康雄さんが入って，今井さんが抜けたところに僕が入りました。そこから教授・准教授のペアでやりだすという形ができてきたんです。だから，二人がやると役割分担で，先生がバーッときついことをいうし，これは経験者だけど（笑）。で，私の方が，それは「こういうことを言いたいのかな？」なんてね（笑）。

Ｔ：フォローしてっていうか。

Ｓ：そんなことをやっていて。とくに，やっぱり自分がゼミを，研究室を主催しだすと，責任が出てくる。ただ先生のいうことのフォローだけじゃ，やっぱ

りだめなので。で，だんだんと小笠原先生が学部長やなんか仕事をし始めて，副学長になって，研究室に出てこられなくなるのが辞める前の２年，まあ学部長時代からだと６－７年か。あの時代から，ほとんど私がゼミをするようになったので，そんな意識でしたかね。

Ｔ：先生は大学院で３年を過ごされて，そのあとすぐ就職なされたんですか。

Ｓ：３年ドクターをやって，１年助手をやって，で，広島文化短大へ就職です。

Ｔ：その時にはゼミとかってあったんですか。短大ではゼミっていうのはないんですか。

Ｓ：ああ，短大ではないね。短大では卒業研究みたいなのは10人くらいのグループはやっていましたけど。18，19歳の女子高校生がそのまま短大生になりましたみたいな話ですから（笑）。

Ｙ：あまり時間もないので，就職の話をお聞きしておかないといけないんですけれども。助手になるのは，自然になるという感じだったのですか。それとも。

Ｓ：そうです。今も，２月のドクター審査の後に，一応やっているのでしょうけど（笑），ドクター各研究室に１人だし。それから助手のポストが，９つはなかったと思うけど，大体各研究室に１人配置できるくらいのポストはあったので，既定路線でしたよね。その代わり１年だよと。

Ｙ：助手の仕事は，どんな。

Ｓ：パーフェクトな助手でしたね（笑）。自分でいうのも申しわけないけど，実務的なことは嫌でもないし，それなりにこなせるタイプだったので。あの厳しい先生の（笑）もとで仕事をしていましたけど（笑）。

Ｙ：講座の仕事と自分の研究ってどっちが。やっぱり講座の仕事をかなりやらないといけない感じですか。

Ｓ：これも人によるのだろうけど，あの時代って助手の１年間っていうのは，自分の研究はせいぜい学会で発表するくらいでした。そこで何かを，論文を，さっきの学位論文はとてもじゃないけど，自分の研究をっていう意識はそんなになかったです。でも，研究室をもらえるので，そこで文献を読んだりすることはできましたが，学生もしょっちゅう出入りするし，いろんな電話も入ってくるし。中四の学会の仕事もしっかりしなきゃいかんしね。まぁ，１年間はしゃあないね，って感じですよね。

Ｙ：でも，今よりも，はるかに助手の人数は多いので。仕事の量としては，当時もかなり多かったんですね。
Ｓ：教育哲学研究室の助手の朝の仕事は先生の部屋に行って，机を拭いて，ゴミ箱片づけて，ってところからスタートするの。鍵は持ってる。当時の先生ってあまり出てこないじゃない。授業と会議の時くらいしかでて来ないけど，事務からも色々連絡が来るじゃない？電話して先生どうなんですかって言わなきゃいけないし。そりゃ研究室にお茶もっていくようなことはしないけど，先生が来られると，コーヒー飲みましょうみたいな。そういう世界ですよね。
Ｙ：そこから文化女子短大への就職というのは，どのような経緯で。
Ｓ：これも小笠原先生のおかげなんです。文化短大がもともと家政系の短大だったところへ，幼児教育学科を作りますと。幼児教育，そういう分野が全然違うので，経験者の先生とか，昔の広島保育専門学校かな，県立の。そこにおられた先生とかを集めて学科を作ったときに，若手で一人くらいとってもいいよという話になって。で，幸い若手が，助手じゃなくして講師っていうのをつけてくれたので，就職しました。
Ｔ：何年くらい。
Ｓ：３年間。
Ｔ：最初の予定というか，最初からそれくらい？
Ｓ：全然全然。そんなの予定も何もなしでした。幼児教育学科に入ってきた学生も初めてなら先生も初めてという世界で。とくに30代の男性教師だったら学生のたまり場になるよね，研究室（笑）。
Ｔ：そうなんですか。たまり場になっていたんですか。
Ｓ：よくまぁ夜遅くまで，僕はしゃべらないけど，学生がぐちゃぐちゃしゃべっているという状況は続いていました。まぁでもそれだけじゃなくして，けっこう，これも実務，教育実習園との調整だったり，実習記録のフォームを作るっていうのを，先輩の幼児教育やっている人からそういう書式をもらって自分で作って，っていう仕事もしました。あとは実習園とか，幼稚園就職回り。学科主任の岡部茂先生，この人にも影響を受けたけど，ま，運転手ですよね。
Ｔ：授業はどれくらい持たれていたんですか。
Ｓ：授業はあんまり。あの時は教育原理とあと演習。それから，いわゆる卒業

研究。卒業研究といっても，ずっと子どもたち，幼児に向けての人形劇の制作とか公演とか，そんなのを学生がやりたがるから，いいよいいよって。
Ｔ：授業はだいぶ広大の雰囲気とは違ったと思うんですけど。
Ｓ：もうそれは全然違いますよね。そりゃね。
Ｔ：それはカルチャーショックとかそういうことはなかったんですか。
Ｓ：うーん，カルチャーショックというほどもなかったけど。なんていうのかな，そんなにもう荒れて騒がしくて声が届かないって感じでもないし。授業中はちゃんとそれなりに，おとなしくして聞いているし。理解度は別として。あんまりその辺は違和感なかった。それこそ，さっきも言ったけど，30歳で，18，19歳のキャピキャピした女の子たちが元気に走り回っているのを見て。ま，楽しく３年間過ごしました。
Ｙ：就職するまでは非常勤等でそういう短大に行かれたことは。
Ｓ：なかった。
Ｙ：初めて行かれたのに，それほど違和感はなかったんですね。
Ｓ：それほど。うん塾講師のアルバイトが長かったので。
Ｔ：そこから福岡女子大に行かれたということは。
Ｓ：楽しくやっていたのだけど，やっぱり研究のための時間はなかなか確保できないし。それから環境的にも。今もそうなのだけど，私が４月から再就職するところだから（笑）。学生集めにも苦労するようなところもあったんでね。もうちょっとしっかりしたところへ出たいな，という気持ちもあったし。公募があったときに，小笠原先生が出してみなさいと。だってやっぱり，小笠原先生に紹介してもらって文化短大に行っているわけだから，さよならと言って勝手に抜けるようなことは仁義を欠くというのがまだあったので。小笠原先生が勧めてくれたので出してみたわけ。ついでに言うと，私が出た後は，ちゃんと後任をここから採りますよということで，今度は小笠原研究室じゃなしに，上原貞雄先生の研究室から採りましょうってことで。そういう流れの中で動いたわけ。
Ｔ：福岡女子大学では，どういう学科というか。
Ｓ：福岡女子大学では，一応所属は文学部だったのですが，教職担当教員です。文学部と，家庭理学部（家政学部家庭理学科）だったかな？文系理系の２学部。

そのなかで一般教養のグループですよね，教員の集団としてはね。教職科目で教育学が私と心理学がもう一人。その二人の先生が教職系。ほかは非常勤の先生。教職系の科目なので，教育実習のお世話とかもするのですが，ノルマとしてはまったく楽な３年間でしたね。

Ｔ：こちらも３年間。この短大と，福岡女子大に勤められている間の研究活動ってどういう感じでしたか。

Ｓ：正直言って，まだ学位なんていうのは視野にも入れてなかったし。年に一回，まだ中四国学会にも入っていたかな。中四でやるか，教育哲学会でやるか。どっかに論文がもし書ければ，って感じかな。今から考えればこの時にもうちょっと真面目にやっとけばって思うけど。年に一回学会，年に一回何かの論文ってくらいが，なにか自分なりのノルマだったかもしれない。研究室で，OB になってからも共同研究みたいなことはあったりしたので。研究会したり，本を作ったりはしていましたね。

Ｔ：特研に出るということもあったんですか。

Ｓ：さすがに，福岡に行ってからはなかった。それは出来なかった。

Ｙ：非常勤で来られていますよね。

Ｓ：そうそう。集中講義とか。

Ｙ：その時に，別に研究のことについて何かするということは。

Ｓ：特にそれは。

Ｔ：哲学といえば年末に集まってというイメージが。特にない感じですか。

Ｓ：はいはい。集まってやっていたのは，ずーっと続けたのは，教育哲学会の前の日に OB 会をやって，現役の院生から小笠原先生ぐらいの世代まで一緒に泊まって，夕食会をして。学会発表をする人はちょっと見てもらって。みたいなことはしてましたね。

Ｔ：短大も福岡女子大も，どちらも女子大なんですけどそこで感じた特別なことなんかありますか。

Ｓ：あんまり意識しなかったな。とくに変わった意識は（笑）。あまり比較する材料を持っていないけど。基本的にまじめというか。とくに福岡女子大は古い，広島女子大と同じかそれより古いくらいの伝統校だし，基盤がしっかりしているし，県立だし少人数だし，さっき言ったみたいに２学部で，落ち着いて

やっているところでしたね。
Ｙ：教職担当だと教職事務のこととかも教員がやらなきゃいけなかったりするんですか。
Ｓ：公立，県立だから事務の人もそれなりにちゃんと揃っていました。卒業論文は持たないので半分寂しいのと，半分楽なのと。あと教職の科目と。で，教職科目はさっき言ったみたいに自分でやるのは教育原理，教育史くらいで，あとは全部非常勤で九大から先生に来てもらうっていう状態でした。
Ｙ：採用試験を合格させるために何か，そういう講義をするというのは。
Ｓ：相談に来た学生には相談にのってあげるけど。そうだね，文学部だったので国語の先生になりたいって人もいたりしました。特別に特訓ゼミというのはしなかった。
Ｔ：その３年を経て，広大に戻ってくる
Ｓ：そうです。
Ｔ：これの経緯は。
Ｓ：うーん。詳しい経緯はわかりません。今井さんが東京学芸大に抜けて。せっかく小笠原先生が２人体制でやっていたのが，今更一人はしんどいって話になったのじゃないかと思いますけど（笑）。
Ｙ：それは先生に来てもらうように，という，そういう話だったんですか？
Ｓ：うーん，どこまで話をしていいのかな（笑）。いや，正直言って，一般公募人事ではありません。たぶん講座の中で，この人事を進めるために何人か候補がいて，この中でだれがいいのかという話はしたのだと思うんです。でもこれ12月ですからね。
Ｔ：12月だったんですか。
Ｓ：ええ。12月っていうか，たぶん下準備はもうちょっと前からしていたのでしょう。「小笠原先生の下に来るんだったら坂越がいるかとか，どこかにだれがいるのか」って話だったと思うのですけど。自分に「あんたはどうする？来るか？」って来たのが12月。そこから慌てて福岡女子大に話をして，福岡女子大のほうも，九大で人を採ろうと思えば採れるので一応納得してくれました。納得してくれたけれども，あの当時，心理学の山本多喜司先生が広大教育の学部長だったけど，頭を下げに来てくれたよ。割愛に（笑）。

Ｔ：その12月の話が来て，次の４月からもう赴任っていう。
Ｓ：そうです。
Ｔ：ご家族もずっと一緒に移動されていたんですか。
Ｓ：うん。プライベートのほうでいうとですね，うちの奥さんは同級生，47教教です。僕より当然先に教員で就職して，五日市とか五月が丘の中学校で教員をしていたんです。文化から福岡に動くというときに子どもができて，仕事を続けるのもちょっときついし，ってことでそこで仕事を辞めちゃったの。で，九州に行って，長女が生まれました。
Ｔ：広島に戻ってきてっていう時も一緒に移動されているわけですね。
Ｓ：そうだね，はい。
Ｔ：広島に戻ってこられての印象って覚えていらっしゃいますか。
Ｓ：うーん……どうだったかな。ちょうど教育学部の西条移転が決まっていた時期だったので，私は，もう，こっちに家を借りたわけ。授業はまだ東千田に通うという生活を１年３か月くらいか，続けました。その間も教育学講座でいうと岡東壽隆さんあたりが中心になって，教室の配置をどうするかとか，研究室の備品，図書を移動させるために，いろいろと講座の中で準備をしたり，結構あわただしい感じでした。次にびっくりしたのが，来年からチューターだよって言われて，チューターって何をするんですかって言ったら，いや宮島に皆と一緒にいって合宿するんだって（笑）。４月何日かに宇品港集合みたいなのが来て，ありゃ？こんなことになってるんだと。
Ｔ：先生が離れられた６年間の間にあれは出来たんですか？
Ｓ：まだあの時どうだったかな。まだ体育会主導だったのかもしれない。
Ｓ：学部とかが表に出るのではなかったと思います。ただ，全学的な動きとして体育会が音頭を取って，宇品から全部，船，フェリーに乗って宮島に行きました。
Ｔ：それ以外の部分では６年前と大差はない感じですか。
Ｓ：大差というか研究室がね，さっきも言ったように教育哲学の僕が経験した研究室というのが，一人ひとり，結局，個人研究という形でしたから。それが，私が帰ってきてみたら，やっぱり前任の今井さんの影響がかなりあったのだろうと思うけど，丸山先生世代が結構，専門的に突っ込んだところで，ヴィトゲ

ンシュタインやります，ハーバーマスやります，モレンハウアーとかっていう，福岡でのんびりしていた大学教員が聞いたら，けっこうすごい，「俺これ知らなかったけど面白いね」みたいなのをこの人達のレベルでやっていた。なかなか院生たちの研究ができているなぁってっていうのが印象ですね。もちろん全部が全部できているわけじゃないけどね（笑）。

Ｙ：何か戸惑われたことだとかはありますか。

Ｓ：うん。最初はやっぱり特にね。助手の時は１年だけと思ってたし，どっちかっていうと助手といっても学生の延長で先生に接していました。皆さんも一緒で，先生のグループの中にバッと入って，どう付き合えばいいのかっていう（笑）。先生は先生なんだけど，という感じですよね。遠慮もしつつ（笑）というような感じでしたけどね。そうだ僕が入ったときはね，山﨑博敏さんはいたけど，深澤広明さんはいないし安原義仁さんもいない，近いところで大林正昭さんか。大林さんはああいうキャラクターだったけど，けっこう「こうすればいいんじゃない」みたいにひょうひょうとしながら，身の振り方をアドバイスをしてくれたりしました。

Ｔ：先生たち同士としての付き合いが始まった感じですか。

Ｓ：うん，だから，この自分に近い世代と，上の世代（笑）。片岡先生・三好先生・小笠原先生（笑）。ここがやっぱり違うのですよ（笑）。

Ｙ：良かったことは何ですか。

Ｓ：良かったこと？うーん，そうだな，なんだろう。改めて言われると（笑）。すごく良い言い方をすれば，僕が６年間離れていて，古いタイプのイタコ研究していた自分が，当時の院生，彼らみたいに，けっこう問題意識も持ちながら，でもちゃんと一次文献読んでるよっていうような，この人達と一緒に喋れるようになったのは，自分の研究にとってはありがたかったですね。やっぱり特研だったりゼミだったりっていうのは，それはよかった。

Ｔ：女子大時代と，広大帰ってきて，どちらがよかったですか？

Ｓ：それはね，生活気楽さという面でいうと，比較にならずに福岡女子大です。自由だったし，気にする先生はどこにもいないし，だって教育って一人だけだもんね？その代わり話をする人もいないけど，でも自分だけの世界だから（笑）。気楽は気楽でしたね。

Ｔ：ドイツに留学されるのはそのあとどれくらいですか？
Ｓ：90年，91年か。ドイツへ行ったときに統合一周年だという話だったので。うちの研究室は，僕の帰ってきた頃，いやもうそれ以前から，僕の下の世代は，今井康雄さんもそうだし木内陽一さんもそうだし，DAAD とかチャレンジして自分でドイツ留学して勉強するという空気がありました。小笠原先生の影響です。僕はそのころマスター，ドクターでしたが乗り遅れです。それが帰ってきたら，先生もドイツへ行けっていうし。で，フンボルト財団奨学生っていうのが，今もそうなんだけど30代でしかダメなんだよね。年齢制限もあるし。当時，教育哲学会会長の村井実先生の推薦状ももらえるし，ってことで，やってみたというところです。ドイツの生活は本当に福岡女子大以上に（笑）これはもうみんな一緒ですね，天国ですね（笑）。何に煩わされることもなく，しかも家族置いていったので，自分ひとりで（笑）。
Ｔ：留学をされた前後では，何が一番違うんですか。それとも同じなんですか。
Ｓ：研究面ではもちろん，史料，材料もちゃんと増えたし。それからイタコ研究から多少，ナチズムだったり思想の研究っていうのが見えてきました。これも正直にしゃべっちゃうと，自分は仕事が遅くって，なかなか学会論文とかできなかったの。だからずっと講師。福岡で助教授になってたんだけど，こっちに帰ってきたときは講師で帰ってきてて，普通は講師を何年かしたら助教授にっていうパターンがありました。でも，先生がちゃんと研究論文を書けという，正直言ってなかなか講師から助教授に上がれなかったの。それで，ドイツに行ってから，アルヒーフのノールの文献だったり改革教育学の文献でなんとか論文を作って，『教育哲学研究』にようやく載っけて，それだったらということで，講師から当時の助教授にしてもらった。まあ，講師と助教授って，ポジション的には同じようなものなんだけど，講師っていう身分は，他の先生からは「まだ助教授にしてもらえんの？」とか言われるじゃない？「小笠原先生となんかあるんか」とか社会科の親しい先生に言われたりして（笑）。ある意味ポジション，ポスト的に少し落ち着いて，という風にはなったかな。
Ｔ：先ほどちらっとナチズムから思想の研究へっておっしゃったんですが，そこをどのような形で転換というか，広げていったんですか？
Ｓ：ドイツへ行く前，ほんとに，ノールのイタコで，ノールだったらこんなに

しゃべるって，ひたすら文献読んでまとめるみたいな研究でした。もちろんそれでもって教育学の基礎理論っていう感じは何とかなるのだけど，でも，どうしてもそこだけじゃだめだと感じていました。自分のドイツ教育学，教育思想の研究としては，まだ全然できていない，足りないっていう。で，ドイツに行く前に，マールブルグでお世話になるクラフキー先生が来日して，ドイツの精神科学の状況とかも，ある程度情報をもらったりしました。で，少し時代のなかでの教育学者っていうような目線で研究してみるのもいいかなって。同じような時期に，これも先輩で，田代尚弘さんがナチズムとシュプランガーの関係で論文を書き始めていました。ノールとナチズムの関係がバーッと注目されるのは80年代ですが，やっぱりドイツ教育学の中でも左派系の教育学者っているから，精神科学的教育学の保守性を批判する文献なんかもあって，そういう目線を持ってドイツに行ってみたら文献が発掘できるということも考えました。これで，ちょっと中期的に研究ができるかな，というふうに思いました。

Ｓ：あちらで出会いというか，そういうことはあったんですか，研究上の。こういう人の話を聞いたときに衝撃を受けたとか。

Ｓ：もちろん。基本的にマールブルクにいたので，マールブルクの研究者の人たち。あと，とくにクラフキーさん以外でっていう話になると，まだあの時には私講師，プリファート・ドツェントという立場の人がいて，これはクラフキーさんの弟子なんだけど，似たような時代の研究をやっているのがいました。彼とはよく話をしました。で，あそこのポスター，エリザベス・ブロッホマンっていう人，この人はドイツの初めての女性教授です。マールブルク大学で。この人を研究している人が，シュミットっていう若手，この人と，いろいろ話し合いました。このブロッホマンという人はノールの弟子です。ゲッチンゲン大学で教えてもらった人という関係もあって。マールブルクから車に乗ってゲッチンゲンへ行って，ゲッチンゲンの図書館でアルヒーフを調べたりとかいうことをやりました。

Ｔ：じゃあ，結構あちらにいた時あちこちに行かれて。

Ｓ：そんなにあちこちじゃないのだけど，時にそういう。あちこち行ったのはフランクフルトへ日本食を食べに行く（笑）。

Ｙ：あと10分しかないんですが，研究科長としての話と副学長の仕事の話をお

聞きしないといけないんですが。研究科長の時代はどんな感じだったんですか。
Ｓ：うーん，なんで研究科長をやろうと思ったかっていうと，そんなに理由もなくて。大人しくしてたら教育哲学研究室の教授でいたと思うんだけど（笑）逆だな，黙っていたらなっちゃったって感じなんだけど，こんなこと言ったら怒られますが。そうだね，当時でいうと心理学の深田博己さんとか，教育学のほうで小池源吾さんや河野和清さんが，そろそろ教育や心理からリーダーを出さないといかんだろうと。古い話というか，だいたい，ここのトップ，学部長というものは教育・心理・教科という昔の３つのこの体制で，順繰りでやってきてたんです。心理学の利島保学部長があって，教科教育学の中原忠男学部長があって，次教育でってみたいな感じで，なりましたと。なったからには，ちゃんと機能を果たさないといけないし，っていう風には思ったのですが。研究科長として一番大きな仕事って何だったのかなという風にちょっと考えてみても，いろんな，その大学改革の時代でもあったのですけど，これは今から考えたらそれは間違いだったという意見もあるかと思うけど，教職大学院を作るか作らないかという判断だったのですよ。先代の中原研究科長は教職大学院に舵切ってやるという風でした。次，僕が引き継いだ時点では，うちは教職大学院ではなかろうと，研究だろうと，という意識があって。で，何とかそれをしのぐ（笑），文科省に行って，教職高度化とか必要なことはやりますけど教職大学院という仕組みには乗りません，っていうのを一生懸命やった。今から考えて良かったか悪かったか。そのプロセスで，これも批判されるかもしれないけど人事に手を付けた，つまり，基本的にいままで講座から上がってきた人事案で通っていたのを，研究科長裁量の人事ポストを増やした。いろんな形でデータを積み上げて，悪い話，どこどこの講座のこの人を次補充せずに研究科のために使わせてもらうということです。研究科長が好き勝手によそへ回したっていうのじゃなくて，教職の講座で実務家の先生を活躍させてくれるのだったらこのポストを使ってくださいという形で。研究科長の介入の余地を（笑），裁量の余地を作った。これも果たしてどう評価されるか。これが大学の人事，コントロールの話になると，たぶんいま教育学研究科の中では，それでもって身動きできないというのが多いから批判も出ていると思うけど。少なくとも研究科の中で，研究科を生き残らせるために，これがいるという判断をしたのは，

まあ，いいか悪いか責任を取らないといけないところですね。
Ｙ：時間がないので（笑）副学長としてはいかがですか。
Ｓ：副学長も自分が手を挙げたわけじゃないけど，研究科長をやっていたし，研究科長の３年が終わろうかという時だったですけど，本部の仕事を手伝えという話がありました。１年あとだったらいいですけどねっていう話をしたのですが，本部の人事の入れ替わりと，こっちの研究科の任期の切れ目が合わなくって，任期途中で１年残して向こうへ行って仕事をし始めた。副学長，理事としての仕事。うーん，これもうまくはいかなかったけど。最初に投げられた課題が附属学校をどうするのかという課題でした。第三者委員会というか関係者委員会を作って梶田叡一先生に委員長をお願いして再編統合案の答申をまとめたけど，結局審議しただけの話に終わってしまったのは，ちょっと辛いところです。あとは，学生教育の担当だったので，さっきから大学が変わったという話もありますが，研究は先生方，自分の仕事だからどうぞしっかり研究してください，でも大学教員として採用されている先生方は教育が仕事ですよっていう，そんなメッセージを出してました。
Ｔ：もう一回副学長をするとしたら，どの仕事に力を入れたいですか？（笑）
Ｓ：もうしたくない（笑）。でもそうか，ここは難しいところですよね。時代状況の中で，文科省が出してくる競争的募集事業の中で手を挙げてやっていかないといけない。本当だったら，もうちょっと落ち着いて，これが本当にいるのかいらないのか，ここは乗るのか乗らないのか，ここはじっとしておくという選択肢もあるのじゃないかみたいなことを考えたい。まあ，離れたら言えるけど，その中で走っている状況の中では，なかなかそれは難しいよね。
Ｍ：私から。先生がかがみ会の時のご挨拶で，今の大学改革の中で広大教育がどうしていくかという話をしてくださったんですけど。その話と先生がそもそもなんで研究科長になったのかって話の中で，順繰りの心理，教育，教科っていうのがある中で誰かがしないといけないっていうものもあった，っていうのも重ね合わせてなんですが。先生が教育学部から出る副学長が必要っていうところで出て行かれたんだと思いますし。それは，あて職というシステム上のことと，教育学を専門にしている人間だから，理学部の先生とは違うことができる，というものがあるということで，そのことを聞きたいのと，同じことをコ

アカリキュラムを作ったり，文科のお仕事をする中で，先生が一緒に仕事をされている中には，大学の先生もいれば，会社の人もいたり，コアカリキュラムの方，教員養成だと，教育の専門であっても教育学が専門ではない，教員養成が専門であっても哲学的・歴史的研究のバックグラウンドがない人がいたと思うんですが。そう考えたときの先生の役割っていうのは小さくはなかったと思うんですが。副学長の部分と，文科，いろんな中教審のお仕事をどう思われますか。

Ｓ：そうだな，有り難いお言葉です。後から自分が機能したかもしれないことを振り返ると，大学の執行部の中に，教育学出身者がいるということは意味があったと思います。大学行政の中で，必ずしも教育や教育学者というのが，最初から前提として求められるか，ちょっとまだわからない。大学行政，大学運営，よく教学と経営を分けるって言いますが，今の状況は一緒になっているじゃないですか？とくに教学だったら教育学的な知見は役に立つかもしれないけど，でも大学の教学っていうのは，さっきから言ってるように，研究が入ってくるし，一人ひとり独立・自立した研究者が集まって大学を成しているので，そういう中で教育の論理というのが，どこまで必要なのか機能するのか。あって悪くはないと思うけど，大学人として教育が必須教養ということは必ずしも言えない。ただ，希望としてはね，広島大学なんだし，教育学の知見を持った人材がいるのだから，それは活用するに越したことはないと思います。で，あまりちゃんとした答えにならないけど，僕らがやっている，人を育てるということは，学校教育の中での教育というイメージがあって，そこから外れて，大学として人が育っていったり育つんだっていうレベルの教える学ぶという世界とはちょっと違うかなとも思います。私はそういう意識を持っていたから。それがどこまで役に立ったかは人が見て考えてくれればいいです。

あとは教員養成ですよね。えっとね，これもスパッとは答えきれないけど，やっぱり教育の論理，教職というものに対してどういうイメージを持つのか，そのあたりは，社会とのギャップが大きいです。いろんな委員会とか出てみても，大学で教員養成をしている人たちの発言と，それから社会の人たち，それからもっと学校教育現場の校長さんとか意見，そことはだいぶ乖離があって。そんな中で現場の論理というか，学校教育の，今のニーズに応えることは必要

かもしれないけれど，それだけでいいのかとも考えます。教員，あるいは教育というものを長いスパンで見たら「それだけじゃないでしょ」っていう見方は，それは意味があるかもしれない。教職課程コアカリキュラムが求められるっていうのも，コアカリが必要だという立場で，「やっぱり教員になるのだったら必要最低限のこれはどこの大学でも勉強しておかないといけないでしょ」とか，大学側の立場で，「いや専門を極めれば教育は出来るんだ」という世界との，せめぎあいの中で，今の大学の実情・現状を見ていると，提示することの意味はあるだろうという判断で，作られたんですけどね。これも作られて４月から動きだして当然批判も出てくるだろうし，実際，コアカリで授業をやってみると，ここは足りないしここはどうしても時間が工夫できないという話はあるし，それをどれだけ拾っていくか。他のところでもよく尋ねられるけど，文科省がガイドラインというか，あれはガイドラインというよりはもっと教員免許の課程認定の話になるから縛りはきついんだけど，それをどこまで主体的に変えられるか。今度やるときには，学会だったり，現場の先生だったり，どこまで連携協力ができるかがポイントになるでしょう。今，教科コアカリの構想があるけど，教科コアカリはすごくよその大学でも関心が高くて，どんな話ですかってよく聞かれます。英語のコアカリが走り出して，大学で英語の先生を育てるのにうまく機能をするかというのはもう一回点検して見てみないといけないなと思います。なんかあんまりちゃんと答えてないけど。

Ｙ：時間になったので，最後に，広島大学の教育学部教育学教室に，教員でも学生でも，何か伝えたいことがあれば教えていただけないでしょうか。

Ｓ：時代状況の中で動いていくしかないので，いま，現にそこにいる人たちが頑張ってもらうしかないっていうことですね。だから，昔々のこういう空気があって良かったねと語り継いでもらっていいんだけど，伝統があるからといって，その伝統だけでやっていける時代でもないし。三時眞貴子さんとちらっとこんな話を乗り合わせたバスの中でしたけど，やっぱり教育学講座なり，教育学教室でもいいんだけど，講座，教育学研究をやっている教育学教育をやっているこの組織が，やはりちゃんと生き残ってほしいと思います。そのために何が必要なのか。ある部分では，山田浩之さんが言うみたいに，みんなで共同研究して，周りからいろいろ言われずに済むだけの業績を「やってるぞ」と示す

ことが必要かもしれない。あとはもう，それぞれが持っているバックグラウンドで，やっぱり学会というか，アカデミズムの世界で自分はこれだけの実績を積んでいてこれだけの仕事をしている，別に大学の中で何を言われようが，これは自信をもって言えるという世界を，それぞれが作ること。時代の中で，求められるものを，半分答えつつ，でも自分の世界を保ちつつ。昔闘争の教育学講座，談合の心理学講座だった，団結の心理学講座だったか？なかなかね，みんなも忙しいし。教育学講座でも，ここのところ改革つづきですよね。三時さんや若い滝沢潤さん，吉田成章さんやなんかが，「この先どうなるのかね」って話をしてくれているじゃない？つまり，闘争激論とは言わないけど，ま，あんまりみんなが「しゃあないね」って言わずに意見交換して議論して「今はこの方向でいこう」って考えてもらうのがいいんじゃないですか。

Ｙ：どうも長い間ありがとうございました。